

# 教育長賞

伊藤 ゆいな(いとう ゆいな) 七国小 4年生

作品名:本当に大切なもの

図書:モモ

「ああ、もう時間がない！イライラして勉強も遊びもうまくいかない。もっともっと時間があればいいのに…。」

そんな風に思っていた三年生の三学期。突然私の『時間』が止まってしまいました。経験した事のない休校生活が始まりました。

最初の数日は、「好きに遊べるぞ。」と嬉しい気持ちでワクワクしていました。ところがすぐに退屈になり、不安と心細さが私をおそいました。私はあんなに欲しがっていた時間を手に入れたのに、どうすれば良いのかわからなくなってしまったのです。そんな時、私は『モモ』と出会いました。

ある日、町のげき場にモモは住みつきます。町の人達は、お金や名声はないかもしれないけれど、自分の仕事が好きで、ほこりを持ち、人と人との関わりを大切にしていました。そんな町の人とモモは幸せに暮らしていました。ところが、町の人々がふと「自分の人生、このままでいいのだろうか。」と考えた時、心のすき間に灰色の男達が入りこみ、自分の人生をもっと豊かにしようと時間を節約し始めます。町の人達は追いたてられるようにせかせかと生き、子ども達まで勉強を強制されます。町が暗く、人々の生活がやせ細っていく様子を見たモモは、町の人達の幸せを取り戻すために一人、立ち向かいます。

悩んでいた私はある日、散歩中に不思議な出会いをしました。偶然通った畑の前に『野菜販売中』の看板が出ていて、お母さんが、「野菜、買っていこうか。」と近くにいた農家さんに声をかけました。この人が塚本さんです。私はてっきり包装された野菜を買うのだと思っていました。けれど塚本さんは、

「じゃあ野菜を収かくしに行こうか。」

と言って菜の花畑へ案内してくれました。まさか自分で収かくするなんて想像していなかった私は、びっくりしてとまどいました。塚本さんはそばに咲いていた菜の花をポキッと折って、口の中にポイッと入れながら、

「菜の花は生でもおいしいんだよ。」

とニコニコしながら言いました。あまりにおいしそうに食べるので、私もおそろのおおる口の中に入れてみました。歯触りがシャキシャキしていて、噛めば噛むほど甘みが広がりました。

「おいしい！」

私は嬉しくなって、箱いっぱい菜の花を収かくしました。

「ここの野菜は、化学肥料や農薬を使わずに育てているんだよ。」

塚本さんは、私の背丈より大きな土の山を見せてくれました。前の年に拾った落ち葉を細かく砕いて土と何度も混ぜ、肥料を作っている事を教えてくれました。

その時、私の頭の中に灰色の男達のささやき声が聞こえてきました。

「そんな苦労して肥料を作らなくても、買えば済むじゃないか。」

「最初から包装した野菜を売れば、時間の節約になるのに。なんてむだなんだ！」

「…それはちがうよ！」

私は、今ならモモのように灰色の男達に立ち向かえるような気がしました。塚本さんは、野菜を自分の子どものように愛情をこめて育て、その野菜を食べる人の笑顔のために毎日、手間や時間を惜しまずに作業をしているのだと思いました。そんな塚本さんの周りには自然と近所の人が集まり、作業を手伝いながら楽しそうに話をしていました。この心豊かな生活が『生きること』なののだと思いました。そして私にとってもこの経験がかけがえのない時間となって、私の心の中で美しい花を咲かせたような気がしました。私は『モモ』を読んで、時間とは私のすべて、生きるすべてなんだと思いました。